

## FD 学外セミナー参加報告書

氏名： 鳩貝 耕一

所属/職名： 教育学習支援センター 教授

参加セミナー名： 公開研究会「レポート課題において何を問うべきか？—オリジナリティが求められる論題とその評価」

セミナー参加日時/場所： 2015年12月5日(土) 13:00~18:00 京都光華女子大学 開光館 253 教室

### ■セミナー内容・所感・授業や本学への活用について

本公開研究会は、科研費の挑戦的萌芽研究「剽窃が困難となるレポート論題の類型化と論題に応じたルーブリックの開発」によるものである。学生が頭を使わないと書けないレポート論題とその評価について、教育学を研究分野とする三名の方がそれぞれのお立場で講演された。

「レポート課題において何を問うべきか？」成瀬尚志（京都光華女子大学短期大学部 講師）

レポート課題において最低限求められることは、

- 授業内容を理解しているかどうか？
- 自分の頭を使って書いているかどうか？

である。教員が以下のような条件のもとで論題を考え提起すれば良いことになる。

- 学生が頭を使わないと書けないような（剽窃が困難となる）論題とはどのようなものか？その条件を考える
- 剽窃が困難となる論題はどのような到達目標になるのか？
- レポート論題で何を評価したいのか

これらに基づいて考察し、以下のような論題の六つの型を提案している。

#### 1. 未解決問題型

学問的にも解決されていない問題を問うもの。

#### 2. 具体例提示型

ある理論や立場が当てはまる事例を挙げさせながら説明させるもの。

#### 3. 整理・分類型

授業で説明した内容を特定のカテゴリーに整理・分類させるもの。

#### 4. 意味づけ型

授業で説明した議論の構造を取り出させたり、事柄間の関連を説明させたり、主張の意味を説明させるもの（議論の構造や事柄間の関係性を理解しているのかどうかを問う）。

## 5. 学習プロセス型

あるテーマについて論述させ、どのようなプロセスでレポートを作成したのかを書かせるもの。

## 6. before-after 型

授業前と比較して、自分の学びがどのように成長したのかについて記述させるもの。これらの型に基づくレポート課題は、学生が自身の頭を使うとともに剽窃しにくいものになるであろうと思われる。

### 「レポート課題における『問い』の重要性」河野哲也（立教大学文学部教育学科 教授）

ご自身が担当されている授業におけるレポート課題についての事例紹介であった。

#### ● 入門演習

前期は文献読解、文献調査からレポート作成、後期は共同作業からレポート作成を行う。

#### ● 3年次ゼミ（省略）

#### ● 「哲学的人間学」（文学部基幹科目）

事前にテキストを読み、黒板前での教員とのディスカッションやグループ・ディスカッションを経て、3000～4000字程度の2回のブックレポートを提出させる。

### 「パフォーマンス課題とルーブリックについて」石井英真（京都大学大学院教育学研究科 准教授）

昨今、アクティブ・ラーニングの成績評価手法としてルーブリックが注目されているが、その評価の前提となるパフォーマンス評価についての解説であった。

パフォーマンス評価（performance assessment）とは、授業中での思考する必然性のある場面において生み出される、学習者の振る舞いや作品を手がかりに、概念の意味の理解度、知識・技能の総合的な活用力などについて質的に評価する方法のことである。

このような評価を前提として、授業において、「知っている・できる」→「分かる」→「（知識を）使える」→「思考を習慣づける」段階にまで質的レベルを上げることを目標としている。

パフォーマンス評価を行うにあたっての客観的な質的評価基準がルーブリックである。講演内容だけではルーブリックの作成方法がいまひとつ良く分からなかったが、ルーブリックの意味づけや作成するための手がかりを得ることができた。

必要事項を記入後、データで教育学習支援センターにご提出ください。

教育学習支援センター：lucks@adm.konan-u.ac.jp(内線：2180)